

## 「〈こと〉としての文学」を読むために

荒井 裕樹

### ①

いまから 10 年ほど前、「研究」と称してハンセン病療養所を歩き回っていた頃のこと。療養所生活 60 年を超える古老から、貴重な資料を見せてもらったことがある。400 字詰め原稿用紙で 38 枚にわたって綴られた、かつてのハンセン病患者の自筆原稿。旧約聖書の「ヨブ記」をモチーフとしたその長編詩のタイトルは「滾る生命」。攞筆年月日は記されていないが、その患者のペンネームの遍歴などから推察すると 1938(昭和 13)年頃のものだと思われる。

文学史的にはまったく無名の患者が残した、まったく無名の詩草稿。それだけのことであれば、特に私の記憶には残らなかったかもしれない。しかし、私はいまもこの原稿用紙を手にした時の衝撃を忘れられずにいる。というのも、その原稿の右肩には「消毒済み」という文字がはっきりと朱書きされていたからである。

かつて、ハンセン病（「癩病」）という病気を患い、療養所に隔離・収容された経験を持つ人にとって、「消毒」という二文字は心の傷と結びついた重い言葉である。北條民雄の代表作「いのちの初夜」（『文學界』1936 年年 2 月号）のなかでも、主人公が入所時に消毒液の風呂に入ることを強要され、屈辱感と絶望感に打ちひしがれる様子が描かれている。

2000 年代以降（特にハンセン病患者に対する隔離政策の違憲性が問われた国家賠償請求訴訟以降）、ハンセン病回復者たちの体験記類が数多く出版されたが、それらにも消毒にまつわる証言は多い。筆者が個人的に聞いた範囲でも、療養所へと向かう道中、自分が歩いた後ろを衛生服に身を固めた保健所員が消毒液を散布しながらついてきたという証言もある。まるで自分の存在自体が「病毒」のように扱われた、屈辱的な体験だったようである。

隔離の根拠法となっていた「癩予防法」（1931 年）には、「病毒ニ汚染シ又ハ其ノ疑アルモノ」の「消毒若ハ廃棄」が定められており、そこには「古本、紙屑」の類まで含まれている。当時「癩病」は電車のつり革からも伝染るとさえ思われていたようで

(この迷信に医学的根拠はない)、患者が手にした手紙や金銭も消毒されたのだという。

インクの染みた紙類をどのように消毒するのか疑問であったのだが、どうやら「真空ホルマリン消毒器」なる器具を使うらしい。耐圧性のガラスケースに物品を入れ、なかを真空状態にする。そこにホルマリンを注入すると瞬間的に気化されて「消毒」を行うことができる。神山復生病院（静岡県御殿場市）の資料室で「消毒器」の現物を見た時、長年の疑問が解消した。そういえば、川端康成のもとに届いた北條民雄の手紙にもホルマリンの匂いが染みついており、居合わせた志賀直哉が逃げ出したという話がある<sup>2</sup>。

先の「滾る生命」という詩を書いた患者は、どうやら原稿を外部に送ろうと考えていたらしい。どこかの文芸誌に心当たりでもあったのか。あるいは、投稿という形で扉を叩こうとしたのか。推測はひとまず置くとしても、この患者が「消毒」という屈辱的な扱いを受けてまで詩を綴り、誰かへ届けたいと思っていたということは確かなようである。閉ざされた療養所での創作というと、ひどく孤独な営みを想像してしまうのだが（そしてその想像はある部分正しいのだが）、その根底では、どこかで、だれかと繋がりたいという切実な思いが脈打っていたのだろう。

先の古老が保管していた資料は、この原稿用紙だけではない。詩の推敲でびっしりと文字が綴られた紙切れや、自作の俳句が綴られた半紙をこよりで綴じたものなど、その方の「資料保存」の執念は極めて些細なものにまで及んでいた。かつての療養所の生活はひどく貧しく、紙は貴重品だったらしい。当の古老によれば、患者たちは薬包紙などの紙片を捨てず、丁寧に伸ばしては、詩・俳句・短歌などを綴っていたようである。

そういえば、被爆者の大田洋子は障子の破れ紙に原爆文学の記念碑的作品『屍の街』（1948年）を綴ったというエピソードがある。どうやら、ある苦境に置かれた人にとっては、文字を綴るという至極単純な営みが特別な重みを持つことがあるらしい。

## ②

同じようなエピソードをもう一つ。身体障害者たちによって創刊・運営された文芸誌の歴史を追いかけていた頃のこと。「文学がライフワーク」と言明する重度障害をもつ人物に、「文学人生で最大の出来事は？」という質問を投げかけたことがある。「文学」にまつわる質問なので、漠然と内面的で形而上的な答えが返ってくるものと期待していた私は、「ボールペンが手に入ったこと」という即物的で形而下的な返答に驚いたのだが、その後の説明を聞いて納得するとともに、自分の不勉強を恥じたことを覚えている。

「脳性まひ」という障害をもつその人には「アテトーゼ（不随意運動）」という症状があり、四肢の運動を自由にコントロールすることができない。無理に動かそうとすれ

ば緊張で不要な力が入ってしまい、万年筆はペン先が割れ、鉛筆は紙に押し付けた先から芯が折れてしまう。自分には皆のように文字を綴ることなどできないのだろうと諦めていた時、ボールペンが登場した。筆圧をかけても折れず、こすっても滲まず、耐久性もある。まさに自分のための筆記具だとさえ思い、その後の人生が劇的に変わったのだという。

いまよりも福祉制度が整っていなかった昔、重度障害者が置かれた境遇は大変厳しいものだった。特に在宅で家族（主として母親）に介護を頼らざるを得ない障害者たちのなかには、「家族介護」特有の閉塞感を証言する人も少なくない。食事から排泄まで介護者の顔色をうかがい、外出もできず、時には「私が死ぬ時はお前も連れて行ってあげる」と真顔で言われることもある。それは「麗しい親子愛」の一言では済まない苛酷な生活だったことだろう。

介護者（母親）は「障害児を生んでしまった」という責任感から、わが子の人生すべてを背負い込もうとする場合がある。子どもを「かわいそう」と思う気持ちが強すぎるがゆえに、介護される当事者（子）からは「過干渉」「親の支配」と受け取られてしまうような行動をとってしまうのである。日本の障害者運動は、母親の誠実な「愛」を断ち切ることが「自立」の第一歩だと主張した。「母よ！殺すな」（横塚晃一）、「我らは愛と正義を否定する」（青い芝の会行動綱領）というスローガンが象徴的だろう。

この方からは、1947年に「創刊」したという手書きの回覧文芸誌を見せてもらったことがある（「創刊号」は散逸していたため、実際に見たのは1950年代半ばのもの）。同じような境遇の障害者たちと文芸同好会を結成し、郵便で回覧したのだという。この回覧誌に参加していた障害者たちにとって、この雑誌は唯一、日ごろの不平不満や怒りを表現できる場であり、また家族以外の人間と繋がれる場であったのだろう。

時代を思わせる粗悪な紙に綴じられたそれは「雑誌」というよりも「紙の束」と言った方が実態に近く、独特の存在感を備えていて、実際にページをめくった時は、ハンセン病患者たちが残した紙片類を前にしたときと同じくらいの衝撃を受けたものだった。

さて、かなり前置きが長くなったが、ようやくこのエッセイのテーマが見えてきた。

ハンセン病患者たちが残した数々の紙片、そして在宅障害者の手書きの回覧誌（以下、便宜上「紙片類」とまとめて表記）。それらは社会に対して何らかの影響を及ぼすようなこともなければ、読むことを通じて快樂を得られるようなエンターテイメント的要素もない。社会の片隅で（むしろ「社会」なるものの外側で）、名もなき人々が綴った、名もなき言葉の断片である。

これらを前にして、私は一つの単純な、しかし大きくて難解な問題に直面した。そもそも私は、これらの「紙片類」を「文学」と呼ぶことができるのだろうか。「日本近代

文学研究」という学問領域に所属してきた者として、何を研究に値する「文学」とし、何をそのような「文学」としないのか、その価値観が大きく揺れ動いたのである。

③

このエッセイの目的は、「文学」という概念が近代日本のなかでどのように形成されてきたのかを論じることではない。そもそも、そのような問いに答えることなど私には到底不可能である。ただ、これらの紙片類が現状の「文学研究」では正統な関心対象にならないだろうということは指摘できる。

だとすれば、これらをあえて「文学研究」という営みの対象にし、何事かを学ぶためには、私自身のなかの「文学」という概念を大きく組み替えなければならない。では、どのように組み替えていけば、これらの「紙片類」を学びの対象としてすくい取ることができるのだろうか。

思えば、これまでの「文学研究」は「〈もの〉としての文学」を対象としてきたのではないか。対して、私はいま「〈こと〉としての文学」に目を向ける必要性を感じている。いまだ生硬な概念であり、かなり乱暴な整理になると思うのだが、現時点で説明し得る範囲のことを述べておくと次のようになるだろう。

「〈もの〉としての文学」とは、誰もが共有し得る（すべき）〈もの〉として、社会のなかで一定の文化的価値を付与された文学のことである。簡単に言えば「作家」の手によってなされ、「文壇」や「文学史」を形成し、「文学市場」に流通してきた文学のことである。それらの多くは『作品集』や『全集』という形で物理的な形態が備えられ、図書館などにも備えられているので、誰もが手に取って読むことができる（読むべき）〈もの〉としての側面を有している。

また、ここでいう〈もの〉とは、有意性や具体性の隠喩でもある。概して、それらの文学は読者の情動を刺激するための趣向が凝らされていたり、文学史上における特異な技法的試みが意図されていたり、場合によっては時節に適った政治的・社会的なメッセージが込められていたりする。つまり、表現された言葉の織りなす世界が自立しており、読者はそれを鑑賞したり、享受したりすることができる。

対して「〈こと〉としての文学」とは、表現の「営み」としての側面や、あるいは表現が生みだされるに至った「状況」「文脈」「出来事」などを重視した概念である。たとえば先の「紙片類」は、かつての患者や障害者たちが「何らかの表現をしたこと」の痕跡を留めているのであり、また「表現せざるを得ない状況があったこと」を証明している、ということができるだろう。「表現という営み」にも、「表現せざるを得ない状況」にも物理的な形はないので、〈こと〉という奇妙な用語で表記している。

また、〈こと〉とは曖昧さや抽象性の隠喩でもある。先のハンセン病患者にせよ、身体障害者にせよ、その文字を綴っている最中は「どう面白く読ませるか」「果たしてこれが読者に伝わるだろうか」などとは考えなかったのではないか。むしろ、その時の感情や衝動のままに手を動かしてみた、というほうが実態に近かったのだと思われる。そのように綴られた言葉が織りなす世界は、一つの自立したものとして鑑賞したり、何らかの明確なメッセージを受け取ったりすることは難しい。

加えて、〈こと〉とは表現者の希少性も想定した概念である。上記のような患者や障害者にとっては、「文字を綴る」こと自体が決して容易ではなかった。その理由には「教育機会からの疎外」、「施設や家族からの検閲や妨害」、「筆記に耐えない身体的障害」、「その障害を補う筆記具の不足」などが挙げられるだろう。だとすれば、そのような困難な状況のもとでも、なお「表現する人がいたこと」や、そのような「苦境にある人物が表現したこと」には特別な意味があると言えるだろう。

#### ④

何故に、「〈こと〉としての文学」という奇妙な概念を設定してまで、名もなき人々の取るに足らない小さな「紙片類」について考えなければならないのか。本稿がエッセイであることをお断りしたうえで、甚だ大仰な指摘を許していただけるのであれば、次のように言うことができるだろう。すなわち、文学の〈こと〉としての側面に注目することによって、「文学表現が人間の生命を下支えする」ような、まさしく「表現の力」とでも言うべきものの一端を垣間見ることができるようになるからである。

上述した「紙片類」に綴られた文字。あるいは、患者や障害者たちの文芸同人誌など。それらに掲載された小説や詩を読んでいると、「何を表現したいのか」「何を伝えたいのか」が明瞭でなく、容易に「解釈」できないものに出会うことが少なくない（エッセイという都合上、事例を提示できないのだが、ご興味のある方は次の拙書を参照されたい。これ以降の記述も基本的には同書の成果を踏まえたものである。『障害と文学——「しのめ」から「青い芝の会」へ』現代書館、2011年。『隔離の文学——ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス、2011年。『生きていく絵——アートが人を〈癒す〉とき』亜紀書房、2013年）。

それらは綴り手の置かれた過酷な境遇を反映しているのであろう、ある種の「辛さ」「苦しさ」「閉塞感」は漠然と感じられるのだが、極端に紋切型な表現であったり、逆に過度に抽象的な言い回しがなされていたりして、その「苦」がどのような性質のものであり、何に起因し、表現者がどうしたいのか、といった点が判然としないものが多い。しかし、実はこの「判然としない分らなさ」や「辛さ、苦しさ、閉塞感が漠然と感じ

られる」という点こそ、「〈こと〉としての文学」の本質的な部分である。

人が経験する「苦」には、おそらく異なる二つの位相が混在しているように私は思う。一つは、その内実や原因を本人が把握し、「なぜ苦しいのか」「どのように苦しいのか」「どういった手助けが必要なのか」といった事柄を明確に説明できるような「苦」である。こちらを仮に〈苦しみ〉の位相としておこう。

対して、内実や原因が本人にもはっきりとは分からず、その詳細について説明することもできないような「苦」というものも存在する。それは、過度の痛みが「痛い」という叫び声さえ封じてしまうように、直面している「苦」が深刻すぎて明確に言語化できないような場合もあれば、「いじめ」「差別」「ハラスメント」のように、「苦」の内実を表現することで報復を受けてしまうために表現できないこともある。このような「苦」を仮に〈苦しいこと〉の位相としておこう。

人は具体的に表現できない「苦」を抱えた時、しかし、それでも自分の苦境を誰かに伝えずにはおれない時、様々な仕方で〈苦しいこと〉を表現しようとするのではないか。言い方を変えれば、「表現の内容」を伝える（「ことば」を聞いてもらう）という形ではなく、「表現しているということ」を伝えて中身は察してもらう（「こえ」を聞いてもらう）という形での表現というものも、あり得るのではないか。

私が関心を持っているのも、実はこの〈苦しいこと〉の表現である。先の「紙片類」に綴られた「辛さ、苦しき、閉塞感が漠然と感じられる」ような表現は、まさしく、〈苦しいこと〉の表現の痕跡だったように思われる。それは論理的で合理的な言葉を駆使して他者への的確な情報を伝える表現ではなく、むしろ「表現していること」自体を受け止めてもらうことによって他者との関係性を構築しようとする表現であると言えるだろう。

## ⑤

日本という社会の中では、病者や障害者たちの〈苦しいこと〉の表現を文学が支えてきた、というのが私のささやかな説である。文学という形態を借りた〈苦しいこと〉の表現が、病者や障害者たちの生の尊厳に深く関わってきたと換言してもよい。具体的に言うと、文学が「人権闘争」「患者運動」「障害者運動」といった種々の当事者運動の源泉となってきたのである。最後に、このような「文学と運動」の関係性をスケッチして、「〈こと〉としての文学」の（現時点で示し得る）可能性について考えてみたい。

欧米の障害者運動がユダヤ・キリスト教の「告白」の文化に起源をもち、語り合うことを通じて発展してきた「語る・まじわり」であったのに対し、日本のそれは伝統的な「身辺雑記」の文化に起源をもち、機関誌や同人誌などに心情を綴りあうことで発展し

てきた「綴る・まじわり」だったと指摘されることがある<sup>3</sup>。

上に引き合いに出してきたハンセン病患者と脳性まひ者は、この「綴る・まじわり」の典型的な事例であるのだが、それ以外に目を転じて、たとえば結核患者を中心とした「日本患者同盟」（略称「日患同盟」）の闘いから、1970年代にラディカルな主張を展開したウーマン・リブに至るまで、「マイノリティ」の立場から提起された社会運動は、多くの場合、機関誌・同人誌・ミニコミ誌などの紙媒体によって組織が形成・維持される「綴る・まじわり」によって支えられていた。

興味深いことに、それらの紙媒体には政治的な主張の表明や事務的記事だけではなく、個々人の感情が吐露された詩・小説・エッセイなどの文学作品もしばしば目にすることができる。社会運動は被抑圧者の置かれた境遇の不当性を訴え、生存権を獲得し、生活の向上を図るものであるから、その主張の表明は世論の支持が得られるように、合理的で明快であることが求められる。したがって「大衆」への浸透性が高い文学がプロパガンダとして機関誌類に登場することは想像に難くない。

しかしながら、実際に誌面に現れた文学作品には、政治的主張を展開するわけでもなく、何らかの問題の解決を求めるわけでもなく、ただ個人の心情が（しばしば極端に象徴化された形で）吐露され、どのように解釈すればよいのか困惑せざるを得ない作品も少なくない（容易に解釈できないプロパガンダなどプロパガンダではない）。

そもそも社会運動は、該当する社会の中で不利益を被り、苦しむ当事者たちが「生きていくため」に引き起こすものである。しかしながら、「生きていくため」の主張をするには、そもそも「自分は生きるに値する人間である」という根源的な自己肯定感が不可欠である。上に紹介したハンセン病患者や脳性まひ者たちにとっては、〈苦しいこと〉を綴り合うことが、このような自己肯定感を得るために必要な営みであったのだろう。

論理的にも合理的にも説得的にも言語化できない〈苦しいこと〉は、沈黙して耐え忍んでいる間は孤独な痛みでしかない。しかし、ともかくも文字にして綴り合い、分かち合うことを通じて少しずつ自己のうちに消化され、他者に助けを求めたり、時には告発したりできるような〈苦しみ〉へと変わっていく。病者や障害者らの文学活動の歴史を追っていると、自己肯定感を得るための第一歩とは「自分は孤独ではない」という実感を抱くことではないかとさえ思われてくる。

結成して間もない組織で、まだ運動の方向性を定め切れずにいるような障害者団体の機関誌類には、文学作品（特に詩や俳句・短歌などの短文学）が比較的多く見受けられるのだが、運動体が成熟して目的が明確化し、組織も洗練されていくにしたがって、機関誌に登場する文学作品の比率も落ちてくるといふ現象がしばしば見られる<sup>4</sup>。これなどは「文学と運動」の関係性そのものを象徴的に表しているように思われる。

つまり、日本の障害者運動というのは、文学を通じて〈苦しいこと〉を綴り合い、互

いに自己肯定感を醸成していくような営みを深層的基盤としつつ、その上に〈苦しみ〉を訴えて種々の問題を解決しようとする政治的な営みが積み重ねられた、二重構造を基本形として発展してきたのではないか。その表層部分については、例えば「福祉学」や「障害学」といった領域において実に詳細に検討・分析されてきたのだが、深層部分については、いまなお十分に語られてはいないように思われる。

「〈こと〉としての文学」という概念は、まだ誰も言葉にし得てない、その深層部分を掘りおこすための一つの重要な視点になり得るだろう。

## ⑥

以上、非常に乱暴な形ではあるが、「〈こと〉としての文学」の可能性について、現時点で示し得る可能性について考えてきた。

そもそも「文学研究」なるものは、「言葉の力」を信じなければ成立し得ない。しかし、ある言葉に価値や尊厳を認め、真摯に研究すべき「文学」として受け止めるか否かは、その言葉そのものの問題というよりも、研究する者の想像力と感受性に関わる問題ではなかろうか。

一枚の紙切れに綴られた、それ自体では明確な意味を成さず、何の価値も持たない文字の断片が、いつか、どこかで、だれかの「生きること」を下支えしたかもしれない。綴られた文字の背後に広がる様々な〈こと〉への想像力と感受性をもって、「文学研究」の新たな可能性について考えていきたい。

## 注

- 1 内田守人『生まれざりせば』春秋社、1976年5月、10頁。
- 2 高山文彦『火花——北条民雄の生涯』角川文庫、2003年、140頁。
- 3 岡知史「日本のセルフヘルプグループの基本的要素「まじわり」「ひとりだち」「ときはなち」」『社会福祉学』33巻2号、日本社会福祉学会、1992年、118 - 136頁。
- 4 この典型的な事例としては、日本の障害者運動に多大な影響を与えた「日本身体障害者友愛会」（岡山県、有安茂・代表）の機関誌『友愛通信』（1954年創刊）が挙げられるだろう。